

「ゑさおもしろ」とは何か——『おもしろさうし』巻一四について——

仲原 伸子

はじめに

『おもしろさうし』全二二巻にはそれぞれ表題が付いており、それによって内容を知ることができる。例えば、第一巻の表題には「きこゑ大ぎみがおもしろ 首里王府の御さうし」という最高位の神女名が付されており、いわゆる「神女オモロ」だと分かるし、第二二巻の表題には「くめの二まぎりおもしろ御双紙」とあり、久米島という「地方オモロ」であることが分かる。その他「あすびオモロ」は神女の神遊びに関するオモロ、「こねりオモロ」はオモロを踊る際の所作が記されたオモロである¹。

ところが、一つだけ説明に困る表題がある。第一四巻の「ゑさおもしろ」である。まず「ゑさ」とは何か。以前は現在の「エイサー」の語源とも考えられていた²が、直接的なつながりは見いだせない。また七〇首のオモロの内容であるが、共通する地名や人名が特になく、様々な内容がうたわれている。

外間守善は『ゑさ』は、集団舞踊に調和する節のことである³とした。「直接的なつながりはない」としながらも、「エイサー」を思い浮かべた上での説である。これまであまり内容の分析がなされないまま、表題の「ゑさ」という言葉だけに捕らわれてきたように思える。本論では一四巻のオモロの内容を分析し、その特徴から「ゑさオモロ」の意味に迫ってみたい。

一、「ゑさオモロ」の内容

外間は「ゑさオモロ」について、「地方にかかわるもので、英雄的人物をほめたたえたものと、当時の社会で有名になっ

た事件を謡ったものが多い。」と説明している。一四巻には国王や高級神女を讃えた内容のオモロはなく、確かにすべてが「地方にかかわるもの」ということができよう。「英雄的人物を讃美したもの」というのは九八二番「謝名思い」のオモロ、九八六番「知花の目眉清ら按司」のオモロのことであろう。「当時の社会で有名になった事件」というのは九九六番「勝連まみにやこ」と九九八番「ゑけり按司とおなり按司」の恋愛を謡ったオモロのことであろう。いずれも有名なオモロである。

一四巻の内容を見てみると前半（九八二番～一〇〇〇番）と後半（一〇〇一番～一〇五一番）に大別することができる。前半は物語的な内容、後半は地方オモロ的な内容である。

先に挙げた三首のオモロ以外にも、九年母を佩くオモロ（九八四番）、山籠もりのオモロ（九八七番）、平良の祭り（九八八番）、桜が咲くように踊る（九八九番）、桑木下で吹く鳥（九九一番）、ゑけりの御鳥になる（九九三番）、ゑけりの袖を濡らす（九九九番）などの様々な内容が前半部に謡われている。⁵⁾

後半部は更に三つに下位分類できる。まずはじめに一〇〇一番から一〇二一番までが越來杜ぐすく、越來世の主、越來杜親のろ、知花後嶽、金ぐすく大ころ（未詳）、中城、上里、小照る曲の親のろ（未詳）、かいふた（与論）の親のろ、津堅伊波ぐすく、鈴鳴り（神女名）を謡うオモロである。次に一〇二二番から一〇二三番までが佐敷親樋川、佐敷い出来按司、佐敷金杜、佐敷おわる思い子、苗代の門、佐敷金杜、手登根の大屋子、平田御宣り子、知念杜ぐすく、久手堅のまちやり子、知念杜ぐすくを謡うオモロで、一連の佐敷・知念オモロとなっている。最後に一〇二四番から最後の一〇五一番までで、屋嘉の大浜、阿嘉大お祝付き、金丸が思い子、勢理客ののろ、内間沖縄（神女名）、聞ゑ大のろ子、東方の大主、桑江、具志川におわる天徳ちやら、平良勝り子、喜屋武杜大ころ、上江洲鳴響み国、宇堅しら殿の娘、与那原掟、読谷山、読谷山、比留のやしの子、照るしなの真庭（未詳）、与那城大屋子、国直り（神女名）、御嶽宮寺（未詳）、中城、安谷屋の杜、久場の子、具志頭、寄り立ち（未詳）、坡名城、君良し（神女名）を謡うオモロである。

後半部の内容をみると、地方の按司や神女やグスクなどを讃美した、地方オモロに類したものとなっている。

る。その順序ははじめに中頭地域、次に佐敷・知念、最後に中頭地域という並びになっており、特に一〇一二番から一〇二三番までは一連の佐敷・知念オモロとなっている。地方オモロである一九巻の佐敷オモロ群には収められていない「手登根」や「平田」という地名が出てくることも注目される。

二、「ゑさオモロ」の歌形

「ゑさオモロ」は内容よりも実は歌形に特徴がある。重複の数、対句部、反復句、ふし名の数についてそれぞれ他巻と比較しながら見てみたい。

(一) 重複について

オモロにはいわゆる重複と言われる歌が多い。錯簡によるもの（巻一七と巻一八、巻二一と巻二二）や、新たに集めたものを追加して再編集したもの（巻三と巻一）、内容に合わせて他巻から集めて編集したもの（巻一二）といった、『おもろさうし』の編集上の問題や編集内容によるところが大きい。

「ゑさオモロ」には重複オモロが少ない。例えば「巻二一あすびオモロ」には九四首中三九首が重複オモロであるが、「ゑさオモロ」には七〇首中わずか六首である（外間文庫本による）。さらに波照間氏によると、重複と認められるものは一〇三二番の一首のみで、残り五首は類歌・参考歌、または重複と認められないものである⁷。以下にその六首のオモロをそれぞれ具体的に比較していくことにしよう。

一四巻一〇三二番

一　ぐしかわに　おわる

あまとくちやらの

おせや　ちやらつゝ

又　おやぐに　おわる

一六巻一一七〇番

一　ぐしかわに　おわる

あまとくちやらの

おそいや　ちやらつゝ

又　おやぐに　おわる

又 月 よか たてば

よりあずび ならて

一〇三二番と一一七〇番を比較すると、「あめとく」が「あめとく」、「おせ」が「おそい」、「つゝ」が「つ」といった表記の異同はあるものの、一・二節目の内容の異同はない。そこで波照間氏は重複と認めたわけであるが、一〇三二番には三節目がある。仮に地方オモロである一六巻が元のオモロだとすれば、一四巻では新たな歌詞を付け加えたことになる。他の重複を見てみよう。

一四巻一〇三三番

一六巻一一六七番

一 たいらまさりきよが

一 たいらまさりきよが

あかはんた おわちへ

あかはんた のぼて

おほたばる みやれば

しらちやねの

よりなびく きよらや

又 とよむまさりきよが

一〇三三番と一一六七番を比較すると、「おわちへ」が「のぼて」という別語に変化しており、一一六七番の後半部分と二節目を省略している。これによって一四巻では一節のみの短いオモロとなっている（ちなみに一節のみのオモロは一五五四首のうち二四四、三九二、四六八、九八一、一〇三三、一一五四、一二四四、一四二九、一四三三、一四五五、一四五六、一四八〇、一五五四番の十三首あり、ほとんどが二節以上のオモロの中では特殊な例といえる）。

一四巻一〇三五番

一六巻一一七二番

一 おゑずとよみぐに

一 おゑずとよみぐに

まみきや いちゑみど しよる

又 おゑず大かわや

御ざけや いちへみど しよる

又 おゑずきゝやれぐに

御ざけは

まみきや いちへみど しよる

一 一七二番を見てみると、反復句がなく一節目の二行と二節目の二行が対句となる形である。一〇三五番は二節目で「おゑずきゝやれぐに」が「おゑず大かわ」という別語になっており、二行目と四行目が入れ替わっている。そして最後の「いちゑみど しよる」を省略する形となっている。

一四卷一〇三六番

一 おきんしらとんのむすめ

一六卷一一六九番

一 おきんのしらとん

ゑけ はひ ようこ はひ

しらとんのむすめ

又 おなじく がはらだむ おりはめ

又 あおう はひ やうかふ はひ

ゑけ はひ ようこ はひ

又 おなじく がはらだむ おうはめ

又 おなじく まだまだむ おうはめ

一 一〇三六番と一一六九番を比較すると、「おきんしらとん しらとんのむすめ」が「おきんしらとんのむすめ」と「しらとん」が省略されて短くまとめられている。また「あおう」が「ゑけ」という別語に、歴史的仮名遣いの「やうかふ」が表音に近い「ようこ」という表記に、そして一一六九番の三節目が省略されている。つまり、一六卷では一節目がⅡ型で三・四節目がⅠ型という複合型だったものが、一四卷では対句なしの形になっている。

一四卷一〇四〇番

一 びるのやしの し

一五卷一一二五番

一 びるのやせの し

一五卷一一二六番

一 きなわ大みやに

ゑのちふつくるに

ゑのちふつくるに

きなわひろみやに

てるまもん てりよら

又 きなわ大みやに

きなわぢやうぐちに

みちへおていきせらに

又 けおのよかるひに

けおのきやがるひに

てだきよら つかい

又 けおのよかるひに

又 けおのきやがるひに

一〇四〇番と一一二五番・一一二六番を比較すると、一一二五番の一節目の二行が一四卷の一節目に、一一二六番の一節目の二行が一四卷の二節目に「ひろみや」を「ぢやうぐち」の別語に変えて入っており、三行目は一一二五・一一二六番どちらとも全く違う句となっている。つまり、一四卷は一一二五番と一一二六番を組み合わせ更に新たな句を入れたオモロである。

一四卷一〇四七番

一 くばのしぎや おもろ

とかでは とうさ

みきや はさめ

世がけひやし みおやせ

又 くばのしが せるむ

一七卷一一九七番

一 まかねこが おもろ

とかでゑは とうさ

みきや はさめ

よもちひやし みおやせ

又 きこゑみやきぜんに

とかごゑは とうさ

一〇四七番と一一九七番を比較すると、異表記以外で「まかねこ」が「くばのし」に、「よもちひやし」が「世がけひやし」と別語になっており、二節目も別の句になっている。主体が別人となった新しいオモロである。

このように重複オモロとされていたオモロは、詞章の表記や対語・対句、記載省略などを考えると、いずれも一五・一六・一七卷の地方オモロが元ではあるが、それを整理し詞章の表現を変えて似たオモロとなっていたことが分かった。これを「重複」とみなさず「改変」とみれば、一四卷は一首以外すべてが重複のないオモロ、つまり新たに編集して集められた巻、ということができないのではないだろうか。

(二) 対句の型について

本節では一四巻の対句の型に注目してみたい。一四巻も他巻と同様、Ⅰ型とⅡ型が中心であるが、「特殊型」やⅣ型と「融合型」に特徴的なオモロがみられる。先に触れた「物語的なオモロ」がその一例である。上段にオモロ本文、下段に対訳、中段に対句・反復句を示した。

九八二番

一 ぢやなもいや

たが なちやるくわが

こが きよらさ

こが みぼしや あよるな

又 もゝぢやらの

あらて おちやる こちやぐち

ぢやなもしゆ あけたれ

又 ぢやなもいが

ぢやなうへばる のぼて

けやげたる つよは

つよからど かばしや ある

(対句なし)

(反復句なし)

1 謝名思いは

誰が 生んだ子か

これの 美しさよ

これの 見たいことよ

2 たくさんの按司が

待ち望んでいた庫裡口

謝名思ひこそ 開けたのだ

3 謝名思ひが

謝名上原に 上つて

蹴り上げた露は

露からこそ 香ばしい

九八六番

一 ちばな おわる

めまよきよらあんじの

A

1 知花にいらつしやる

目眉の美しい按司が

又	ちばな おわる	A (I型)	2	知花にいらつしやる 歯口の美しい按司が
又	みはちまき	B (対句なし)	3	御鉢巻きを
又	てちよくまき しよわちへ		4	手強く巻き しなさつて
又	しらかけみしよ	C	4	白掛け御衣を
又	かさべみしよ しよわちへ	C' c (IV)	4	重べ御衣 しなさつて
又	といきゝおび	D	5	十重きき帯を
又	まやし ひきしめて	D' d (IV)	5	廻し 引き締めて
又	大かたなよ	E	6	大刀を
又	かけさし しよわちへ		6	掛け差し しなさつて
又	こしかたなよ	E' (I型)	7	腰刀を
又	いかささし しよわちへ		7	厳さ差し しなさつて
又	ひぎやかわさば	F (対句なし)	8	山羊皮草履を
又	うちおけくみ しよわちへ		8	打ち置き履き しなさつて
又	うまひきの	G	9	馬曳きの
又	みちやひきのこたら	G' g (IV型)	9	御駄曳きの小太郎が
又	ましらばに	H	10	真白馬に
又	こがねくら かけて	H' h (IV型)	10	黄金鞍を 掛けて
又	まへくらに	I	11	前鞍に
又	てだのかた ゑがちへ		11	太陽の絵を 描いて
又	しるいくらに	I' (I型)	12	後鞍に

月のかた ゑがちへ

月の絵を 描いて

九九六番

一 かつれんまみにやこは やて おちへ
又 中ひやくなこみなこは やて おちへ
又 ひる なれば きもかよい かよて
又 よる なれば いめかよい かよて
又 にしみちの ぢやなみちる いきやしゆ
又 ひがみちの やぎみちる いきやしよ
又 ひが道は やぎのおもいきや まちより
又 にし道や ぢやなおもいきや まちより
又 いぢや やけな中みちぢよ いきやしよ

A (I型)
A' A
B B
B' B
C C
C' C
D D
D' D
E (対句なし)

1 勝連まみにやこは 病んでいて
2 中百名こみなこは 病んでいて
3 昼になれば 肝が 通い 通つて
4 夜になれば 夢が 通い 通つて
5 西道の 謝名道こそ 行こう
6 東道の 屋宜道こそ 行こう
7 東道は 屋宜の思い人が 待っている
8 西道は 謝名の思い人が 待っている
9 いざ 屋慶名中道をぞ 行こう

九九八番

一 おとまこい
あかまこい おかるな
又 おがやへより
おわよりな ゑけりあんじ
又 といし いちへれ
あしやげ いぢへれ おなりあぢ
又 のおだにが

A
A' a (IV型)
B (対句なし)
C
C' c
D (対句なし)

1 妹まこい
吾がまこい おられるか
2 あなたの家から
いらしたのですか 兄按司
3 といしを 出さない
あしやぎを 出さない 妹按司
4 何を

又	いぎや おわにぎや ゑけりあんじ	E	5	言いに いらしたのか 兄按司
又	世こと せに おなりあんじ	E'e	6	世事を しに 妹按司
又	世さうぜ まは 世さうぜ まは ゑけりあんじ	F	7	世事は いやです 兄按司
又	世さうぜ まは 世さうぜ まは ゑけりあんじ	F'f	8	世想ぜは いやです 兄按司
又	しま ゑれい 国 ゑれい おなりあんじ	G	9	島を 貰え 妹按司
又	しまも まは くに も まは ゑけりあんじ	G'g	10	国を 貰え 妹按司
又	うみちへ ゑれ おかちへ ゑれ おなりあんじ	H	11	島も いやです 兄按司
又	うみちへ ゑれ おかちへ ゑれ おなりあんじ	H'h	12	国も いやです 兄按司
又	うみちへ まは おかちへ まは ゑけりあんじ	I	13	海幸を 貰え 妹按司
又	うみちへ まは おかちへ まは ゑけりあんじ	I'i	14	陸幸を 貰え 妹按司
又	たま ゑれい つしや ゑれ おなりあんじ	J	15	海幸は いやです 兄按司
又	たま ゑれい つしや ゑれ おなりあんじ	J'j	16	陸幸は いやです 兄按司
又	しなわにな やびきにな ゑけりあんじ	K	17	玉を 貰え
又	しなわにな やびきにな ゑけりあんじ	K'k	18	粒玉を 貰え 妹按司
又	しなわにな やびきにな ゑけりあんじ	L	19	撓いましよう 兄按司
又	しなわにな やびきにな ゑけりあんじ	L'l	20	靡きましよう 兄按司
九八三番	一 はなぐすくあんじつきの大や	A	21	玻名城按司付きの大親が
又	花城ちやらつきの大や	A' (I型)	22	花城ちやら付きの大親が

又	ひとりぐわの	B	一人子の	3
又	やぐさぐわは	B' b (Ⅳ型)	やぐさ子を	4
又	ほかあたりに	C	屋敷の外に	5
又	うちあたりに	C' c	屋敷の内に	6
又	あへる	D	初刈物が	7
又	はつかりやが	D' d	下白部を	8
又	したしらびよは	E	選んで	9
又	たちゑらびに	E' e	筋選びに	10
又	すぢゑらびに	F	選んで	11
又	はたよみやは	F' f	三十説を	12
又	みしよみやは	G (対句なし)	しておいて	
又	はなぐすく	H	玻名城	
又	いちやがわに	H' h	いちや川に	
又	おれて	I (対句なし)	降りて	
又	かせ はゑちへ		総糸を延ばして	
又	ぬの はゑちへ		布を延ばして	
又	おれて		降りて	
又	おもひがけず		思いがけず	
又	しよりあくかべ		首里赤頭部に	
又	いきやて		行き会つて	
又	まなたも	J	真人達も	
又	こが みぼしや	J' (Ⅰ型)	これが	
又	ありよれ		見たいと思つて	
又	おきてたも		いることだ	
又	こが きよらさ		掟達も	
又	ありよれ		これが美しくあることだ	

まず九八二番は対句をほとんどたず、叙述が一直線に進行する「特殊型」、九八六番は「I+IV」型、九九六番はI型(A)、九九八番はIV型(A, A^a)、また九八三番も「I+IV」型である。いずれも反復句のないオモロである。このように物語的な内容のオモロにIV型や「I+IV」型の複合型が多いことが分かる。

オモロの対句部は対句を連ねながら内容を展開していくが、最終節を「対句なし」にするオモロも多い。最終節を対句の片方だけすることによって、長く続くであろう内容を終わらせるためだと考えられている。

一四巻では対句の欠落したものが最終節ではなく、オモロの途中にあるものが多い(九八三、九八六、九九二、九九六、九九八、一〇〇〇、一〇〇四、一〇二七、一〇三〇、一〇三四、一〇三五、一〇四四、一〇四六、一〇五〇、一〇五二)。これについては他巻の対句関係を見てみなければ詳しいことは分からない。次の機会に譲りたい。

(iii) 反復句について

オモロは対句部と反復部とで歌形が成り立っている。反復句とは旋律の繰返しを表すものである。反復句には囃子や感嘆詞などの意味を待たない言葉でできたものと、意味を持つ言葉でできたものがある。

オモロ一五五四首のうち、反復句を持たない「反復句なし」は三五首である。¹⁰⁾以下に巻ごとの番号をあげる。

四巻(一九八)、六巻(三三二)、九巻(四九二、四九三、五〇七)、一〇巻(五二七、五三五)、一一巻(五五七、五六二、五九〇)、一三巻(七八七、七九四)、一四巻(九八二、九八三、九八六、九八八、九九〇、九九六、九九八、九九九、一〇〇六、一〇一一、一〇一九、一〇三三、一〇三五)、一五巻(一〇八三、一一二三)、一六巻(一一六一、一一七二)、一七巻(一一八二、一一九二)、一九巻(一二二七)、二〇巻(一二九〇)、二二巻(一二四四、一四七七)、※一・二・三・五・七・八・一二・一八・二三巻は〇首

このように、「反復句なし」の数が他の巻では一首から三首であるのに対し、一四巻には一三首も集中している。オモロは基本的に反復句を持つものであり、「反復句なし」が特殊ともいえる。

(四) ふし名について

「ふし名」とは曲名のこと、本来はその内容に合わせた言葉が選ばれるものである。ところが、オモロの「ふし名」はそのほとんどが別のオモロが由来となる「間接命名」となっている。故に「ふし名」は後代に付されたものと考えられている。オモロの「ふし名」については未だになどが多い。

オモロには基本的に「ふし名」が付されているが、一五五四首のうちふし名が付されていない「ふし名なし」(「同ふし」)とも付いていないものも多く一九二首ある。

「ふし名なし」のオモロ

一卷(〇)、二巻(〇)、三巻(六首)、四巻(四首)、五巻(二二首)、六巻(二首)、七巻(二首)、八巻(七首)、九巻(九首)、一〇巻(一一首)、一一巻(二首)、一二巻(二七首)、一三巻(一五首)、一四巻(六三首)、一五巻(〇)、一六巻(〇)、一七巻(六首)、一八巻(二首)、二〇巻(二首)、二二巻(二〇首)、二二巻(三首)

巻別に見ると「地方オモロ」にはほとんど節名があるが、巻五「首里おもしろ」、巻一二「あすびおもしろ」、巻一四「ゑさおもしろ」に「ふし名なし」が多いことが分かる。特に「ゑさおもしろ」は七〇首のうち六三首に節名がない。しかも節名の付いている七首のうち五首は同じ巻内が節名の出所となっているのである。

つまり一四巻にはあえて節名を付けなかったのではないだろうか。オモロの節名は付け方や意味などそれ自体が特殊なものではあるが、一四巻においては節名を付けなかった特別な理由がありそうである。

おわりに

以上、これまで見たように一四巻「ゑさオモロ」は他巻と比べかなり特徴的な巻であることが分かった。

① 内容

前半部は物語的な内容のオモロ、後半は地方オモロ的な内容となっていた。つまり場面や内容はさまざまであるが、「ゑ」という共通した理由で集められたオモロであるということ。

② 重複オモロがほとんどない。

重複オモロと考えられていた数首は地方オモロである。それを元に「改変」されたものであるため、「重複」と認められないものであった。つまり一四巻は重複オモロがほとんどない、全く新しいオモロが集められた巻である。対句の型

玉城政美はⅠ・Ⅱ型が原初的な歌形であるのに比べⅣ型その他はより進行した型であると考えている（「オモロの歌形」）。だとすると、物語的な内容であるオモロがⅣ型や特殊型であるというのは、「地方オモロ」や「王府オモロ」などよりも比較的時代が新しいものということができるかもしれない。

④ 「反復句なし」が多い。

歌唱法¹²が他巻と違うのか。玉城政美氏は南島歌謡の歌唱法を「復唱法、分担歌唱法、交互歌唱法、斉唱法、独唱法」などに分類した。オモロの歌唱法についてはまだ不明ではあるが、基本的に対句部と反復部で歌唱者が分かれたと考えられている。では、反復句がない対句部のみの場合はどのように謡われたのか。

⑤ ふし名がほとんどに付けられていない。

一四巻にはあえて節名を付けなかったのではないか。付けなくてもいい理由があったのか。

「ゑさ」が「節名」であつたならば、「ゑさ」という節で謡われたものが集められた巻ということになり、一四巻のほとんどのオモロに節名が付さなかった理由が納得できる。

また外間は「呪的な祭式オモロに次ぐ古いものとみなされる¹³」としているが、歌形や内容から考慮すると、「ゑさオモロ」は他巻より進化した新しい時代のオモロなのではないだろうか。つまり一四巻「ゑさオモロ」は、「ゑさ」という節で謡われた比較的新しい時代に集められた巻、と言えるのではないか。

最後に、対句の型がⅠ型とⅡ型以外のオモロについては、すべてのオモロの内容を検討していく必要がある。今後の課題としたい。

【謝辞】

大学の研究生として残ることになった私は、嘉手苅千鶴子先生に「おもしろ研究会」を紹介され、波照間永吉先生に出会った。先生の気さくで温かいお人柄に惹かれ、研究室に出入りするようになった。それ以来、先生のお仕事のお手伝いや調査に同行させていただきながら、研究者としての生き様を学ばせていただくことができた。

刊行間近だった『沖繩古語大辞典』、博士号を取得された大著『南島祭祀歌謡の研究』、毎週集まって勉強会をした『定本 琉球国由来記』、外間守善先生との最後の共著となった『定本おもしろさうし』、波照間先生の代表的な著作が琉球文学研究に欠かせない重要な文献であり、そのお仕事に関われたことが貴重な経験となった。

先生の校正はいつも達筆な細かい文字でびっしり書き入れられていた。妥協を許さない厳しさの中にも人間愛にあふれていた。

波照間先生が退官されるにあたり、長年の宿題となっていたオモロの論文を執筆した。未熟な論文で大変恐縮ではあるが、これまでの学恩に対する感謝の意を表したい。

【注】

1. 中には表題と内容が違うものもある。「首里多とのオモロ」は首里に関するオモロが入るべきだが、実際は久米島オモロとなっている。）
2. 伊波普猷『『エイサー』といふ語について』（『伊波普猷全集 第八巻』）
3. 外間守善『おもしろさうし（下）』（四五三頁）
4. 外間守善『南島文学論（三三四頁）』
5. 外間は『多さおもしろ』にみる抒情の芽ばえ』（『南島文学論』）で叙情的オモロから叙事的オモロへの移り変わりを見ている。
6. 重複オモロの研究については、世礼国男、仲原善忠、外間守善、波照間永吉、島村幸一がある。
7. 波照間永吉「重複オモロの実相」
8. 玉城政美「オモロの歌形」によると、オモロの歌形はⅠ型（一節内に対句項が一つ（A）ある型）が一番多く、次に多いのがⅡ型（一節内に対句項が二つ（A, A）ある型）で、この二つの型がほとんどを占める。
9. 玉城氏の特異型の「④対句をもたないもの」に分類される。
10. 波照間永吉「オモロ反復句一覧（巻別）」
11. ふし名の研究には世禮国男、『琉球音楽歌謡史論』（琉球新報一九四〇年）、仲原善忠『おもしろふし名索引』（沖繩文化研究叢書第二集、一九五一年）、池宮正治『おもしろさうしふし名索引』がある。
12. 玉城政美「南島歌謡の歌唱法」（『南島歌謡論』）

【参考文献】

- 外間守善・波照間永吉『定本おもろさうし』（角川書店、二〇〇二年）
外間守善『おもろさうし 上・下』（岩波文庫、二〇〇二年）
仲原善忠・外間守善『おもろさうし辞典・総索引（第二版）』（角川書店、一九六二年）
沖繩古語大辞典編集委員会編『沖繩古語大辞典』（角川書店、一九九六年）
外間守善『南島文学論』（角川書店、一九九五年）
池宮正治『おもろさうしふし名索引』（ひるぎ社、一九七九年）
玉城政美「オモロの歌形」（琉球大学法文学部紀要第二五号、一九八一年）
玉城政美『南島歌謡論』（砂子屋書房、一九九一年）
波照間永吉「オモロ反復句一覧（巻別）」（沖繩芸術の科学第四号、一九九一年）
波照間永吉「重複オモロの実相」（沖繩芸術の科学第八号、一九九五年）
波照間永吉『南島祭祀歌謡の研究』（砂子屋書房、一九九五年）
小野重郎『南島歌謡』（第一書房、一九九五年）
伊波普猷『伊波普猷全集 第八卷』（平凡社、一九九三年）